

[書評]

嘆願におけるホメーロスとギリシア悲劇のあいだ
——岡道男著『ギリシア悲劇とラテン文学』（岩波書店 1995）第四章
「嘆願劇 —— ギリシア悲劇にかんする一考察 ——」に寄せて——⁽¹⁾

I はじめに

近年の嘆願研究の出発点になった論文の冒頭、ジョン・グールドは次のように述べる。「ホメーロスから紀元前5世紀、さらにそれ以降も、ギリシア文学の伝統上・神話上のテーマ及び同時代の歴史記録双方において、社会的・宗教的制度としての嘆願 (*hiketeia*, *supplication* [英訳]) は際立ったものとして登場している。」⁽²⁾ 本論文(岡論文)は、特にギリシア悲劇における「嘆願劇」に焦点を合わせて嘆願の特質を分析し、同時にそれを通じて、「嘆願劇」解釈に新しい寄与をなさんと試みた作品である。代表的嘆願劇四作品(A., *Supp.*, S., OC, E., *Supp.*, *Herac.*)を、一括して取り上げてクリティシズムを試みたものとしては、管見の限り、本論考は内外における最初の本格的な研究であるのみならず、嘆願研究自体に対して斬新かつ極めて興味深い視点を示唆していると考えられる⁽³⁾。しかし他方で、本論文が嘆願劇に視点を限定し、ホメーロス以来の嘆願行為全体のもつ様々のインプリケーションやコンテクスト、とりわけその成立根拠との関連で考察する姿勢がやや不明確なために、上記の新しい視点が十分展開されていないようにも思われる。以下では、まず本論文の骨子を紹介した後、評者の関心に従って、示唆された幾つかの新しい視点やクリティシズムの中に含まれる問題点を指摘したい。次に、それらの問題点についてホメーロスとギリシア悲劇(嘆願劇)を比較することによって、著者によって示唆された嘆願研究のパースペクティブに若干の補足を加えることができると考えている。

II 論文骨子と問題点

著者は冒頭まず、嘆願の慣習はホメーロス以来存在するとした上で、その成立根拠を嘆願者の神的不可侵性の承認、そして、最終的には「嘆願者を守るゼウス (*Zeus Hikesios*)」の宗教的権威に求める。しかし、社会的制度としての嘆願は、しばしば嘆願者の受入れないし保護をめぐつ

て、受入側、即ち聖域または祭壇のある地域の支配者ないしポリスと、迫害者側、そして嘆願者の間に政治的宗教的コンフリクトをしばしば生じる⁽⁴⁾。これをドラマ化したのが嘆願劇である。このように嘆願及び嘆願劇を把握した上で、著者は、嘆願劇の基本構造として六つの要素を抽出し、単に嘆願のモチーフが見られるに過ぎない作品と区別して、四つの作品を嘆願劇として分析の対象に絞る（188—190頁）。ここで注目されるのは、著者が、嘆願者に対する神的不可侵性の観念と、他方で嘆願者受入れをめぐる関係当事者間に生じるコンフリクトに着目して分析してゆく姿勢であり、ここから著者は具体的な作品解釈ないしクリティシズムを提示している。そこでまず、著者のA. *Supp.*の分析（190—200頁）を例にとってこの点を見てみよう。

ダナオスの娘達の嘆願が「薄弱な根拠」（195頁）に基づくものであるにも拘らず成功するのは何故かという問題に対して、娘達は嘆願のもつ宗教的役割を担当し、ダナオスが政治的側面を担当するが、執拗かつ脅迫とも言える嘆願を行った前者が決定的役割を担った、ということを著者は論証する（197頁）。そして、ここには嘆願のもつ二面性、即ち宗教性と政治性が明白に示されていると言う（198—199頁）。この指摘は管見の限り、オリジナルでかつ極めて示唆に富むが、著者のいう宗教性と政治性が具体的に何であるかについては、ここでテキストに即してより詳しく吟味してみる必要があるように思われる。何故なら、娘達（コロス）の嘆願要求のスピーチの論理を丹念に追跡すると、彼女達と受入れ側であるペラスゴスには血縁（ないし親族）関係（kinship）があること、換言すれば彼女らは単なるクセノスではないこと（「内国人かつ外国人」、618, *xenikon kai astikon*）が判明する。他方で、もし彼女らの嘆願が拒絶されるということは、結局嘆願の神ゼウスが、イーオーに産ませた子供エパボス(40-46)を侮辱する (*atimasis*) ことを意味することになると言うが(168-175)、血縁関係からくるオブリゲーションがここで強調されている。他方でまた、イーオーとの密会を発見して怒ったヘーラーがイーオーを牝牛に変え、その結果イーオーが苦難を被ったことへの償いをゼウスに要求する。ここには一種のレシプロシテイ (*reciprocity*) の論理が含まれていると見てよい。このように娘達（コロス）のスピーチには、ただ嘆願者の不可侵性やゼウスの権威の主張のみならず、血縁

(親族) 関係とレシプロシティの巧妙なロジックが織り込まれている⁽⁵⁾。

次に、ペラスゴスの政治的側面の役割が、この作品ではマイナーであるとの指摘もまた極めて重要である。確かに、嘆願者の受入れはペラスゴスの独断では為し得ぬことであり、アルゴスの人々の（一致した）同意ないし承認を必要とする(605, 615-624)。また、ペラスゴス自身受入れから生ずる迫害者（アイギュプトスの息子達）とのコンフリクト、受入れ拒否に伴う穢れを心配するが、王は嘆願者の保護者ゼウス(*Zeus hikter*)の怒りを畏れて受入れを決断する(478-479)。この決断は比較的容易になされ、また王もデーモスも嘆願者の味方をするだろうと比較的オプティミスティックである(488-489)。このように見てくると、ペラスゴスの果たす政治的役割が小さいことの一因は、王（及びダナオス）のアルゴスの人々への説得が容易に、反対もなく為されることにあるように思われる⁽⁶⁾。

著者が着目した嘆願者の神聖不可侵性と受入側の政治的コンフリクトという二つの問題点は、ダナオスの担う政治的役割と娘達の担う宗教的役割を区別して分析することによって、一層明確になり、かつ展開されている。その結果、ここでの神聖不可侵性は、娘達がスピーチにおいて血縁関係および相手方とのレシプロカルな関係を主張することによっても基礎付けられていることが明らかになる。他方、政治的コンフリクトは、支配者とその土地のメンバーとの関係、特に説得等によって嘆願者受入れに同意を得る過程として具体的に描かれている。このように、嘆願者のスピーチの中に見られるロジック（具体的には、血縁ないし親族関係とレシプロシティへの言及）、そしてもう一つは、嘆願者受入決定過程における受入れ側の政治的コンフリクト、換言すれば、受入れ責任者ないし保護者が当該住民ないしポリスをいかにして説得するか、さらに嘆願者をめぐって保護する側と迫害者側はいかなる対立関係にあるか、この二つの問題領域が極めて重要なものとして浮かび上がってくる。著者の A. *Supp.* 分析は上で示したように、既にこの問題の重要性を示唆するものであった。著者の個々の作品分析は、あくまでテキストに即して行われており、扱われている論点は多様であるが、評者の問題関心に引き付けて言うことが許されるならば、その分析視角は上記のような問題点に整理することが許されるのではないかと思われる。

ところが、この二つの問題領域は、グールドの嘆願論文では、必ずしも十分に扱われていない。即ち、グールドの分析は、嘆願行為の正当性の根拠、或いは何故嘆願行為は被嘆願者に受入れを強制する力があるのかという問いに対して、比較人類学的知見を交えながら、主として儀礼ないし儀礼的行為 (ritual, or ritualised behaviour) から説明を試みたものであり、当時としてはもちろん現在の研究動向に照らしてみても極めて斬新なものである。それ故、スピーチと儀礼的行為が対置され、嘆願のスピーチのロジックの分析は不十分に終わっている⁽⁷⁾。他方また、グールドは嘆願行為のタイプを、被嘆願者への身体的接触による嘆願と祭壇ないし神域への接触に大別し、ホメーロスではわずかの例外を除いて、嘆願行為は身体的接触の方であり、後代世俗化過程の中で *asylia* という政治的・社会的制度へと発展するに連れ、後者のタイプが優勢を占めると述べるに留まり、かかる政治的制度としての嘆願の分析を考察の対象から外している⁽⁸⁾。その結果、嘆願スピーチの分析も、ポリスが絡んだ受入れ過程におけるコンフリクトの考察も脱落することになった。その点、著者の本論文は、この二つの問題点を指摘しており、嘆願研究に積極的貢献を為すものといえる。

しかしながら、本論文も、十分議論が展開されているとは言えない面があるように思われる。その結論部 (228—231頁) において、著者は、嘆願者の神聖性について、悲劇作家や作品によりその差が見られ、E.では祭壇の意義は薄れ、宗教的神聖さよりも「きまり」ないし「慣習」や (保護者の) 「名誉」を根拠にして受入れを求め、他方 S.OC では、嘆願者は神域からその神聖さを獲得するのではなく、神託⁽⁹⁾により、味方には恩恵を、敵には害を与える権力を有するものとして描かれている、とする。このように、著者は嘆願行為の正当性根拠について、一般的前提、即ち神聖さ宗教的確信或いはゼウスの権威か慣習ないし世俗的価値、という概念で判断し、結局神聖さの程度の差という尺度で計っているように思われる。他方、受入れ過程のコンフリクトの問題については、嘆願者の要求及び迫害者との対立に関する受入側の政治的、倫理的判断が前面に現れ、それらの問題に関する支配者とそのポリス (住民) 間のコンフリクトの可能性、そしてそれゆえ (必ずしも論旨は明確ではないが) 説得の必要性が高まると考えているような印象を受ける。最後

に著者は、「古来神聖とされてきた嘆願という慣習の世俗化こそ、嘆願劇というジャンルに変化に富む発展をもたらした要因の一つ」と締めくくるのである。ここでは嘆願者の神聖さの根拠と受入れ側のコンフリクトの具体的分析は、神聖性ないし宗教性と政治性ないし世俗性という一種のダイコトミーを用いたことによって十分展開されなかったかのような印象を与える。

それでは、二つの問題点に対して、どのようにアプローチすればよいであろうか。評者がここで提示したいのは、この問題点に関するホメーロスとの比較という、これまで試みられてこなかった方法である。これを通じて、嘆願における両者の共通点と相違点が明確になるとともに、著者によって示唆された視点が、一層展開される可能性があるように思われる。何故なら、古来の嘆願の慣習が描かれていると暗黙の前提にされているホメーロスでは、本当に著者のいうように、嘆願劇と対置されるように、嘆願は神聖なもので、嘆願者はその神聖性を自明の前提として保護を請求し、また受入側にコンフリクトも生じなかったのであろうか。ホメーロスとの比較をすることで、神聖さの希薄化、あるいは世俗化ないし政治化という特徴付けを相対化するとともに、先述の二つの問題点をホメーロスとの比較において特徴付けることにより、示唆的ではあっても、より具体的に把握できるのではないだろうか。そこでまず、残りの三つの嘆願劇において、著者の分析を手掛りとしながら、上記の二つの問題点がどのように悲劇作家によって扱われているかを検討し、その後ホメーロスを見てゆくことにしたい。

Ⅲ 嘆願劇における嘆願のスピーチと受入れ側のコンフリクト

E.の *Supp.*における嘆願者はアドラーストス及びアルゴスの（テーバイを攻めた）七将の母親達である。彼女等の嘆願行為としては、デーメーテールの祭壇に座るのみならず、被嘆願者の一人、アイトラーの膝にタッチするという、グールドの分析に従えば、二重の拘束力を伴う厳格かつ強力なものである。しかし他方で（それ故にというべきか）、そのスピーチは案外単純でかつ弱い。実際、まず、アドラーストスのテーセウスへの嘆願(113-262)は失敗に終わる。何故なら、著者が指摘しているように（202—203頁）、アドラーストスが嘆願を正当化する根拠として挙げることはせいぜい死者の埋葬という「神々の

掟」くらいしかなく⁽¹⁰⁾、テーセウスは神託の解釈を誤解から惹起した戦争責任がアドラーストスにあるかどうかの裁判人 (253, *dikastes*) として振る舞う。実際、アドラーストスがスピーチで強調するのは、彼等嘆願者への「哀れみ」 (194, *oiktos*, 168-169 *oiktiro*) しかないのである。

他方、コロス (母親達の嘆願者) は、一方で自分達、他方で嘆願の相手であるテーセウス、その母アイトラー、そしてアテーナイとの間に、血縁関係があると主張する。何故なら、アルゴスはペプロスの土地で、そのペプロスは、テーセウスの祖父ピッテウスの父であるからである (263-266)。しかし、それ以上の繋がりはなく、またレシプロシティに訴えるような過去の関係もない。彼女等は専ら、膝にすがるという嘆願行為と「哀れみ」 (281, *oiktros*) を強調するのみである (271-285)。ところが、これに動かされたアイトラーがテーセウスと議論をして、受入れを承諾させる。アイトラーのスピーチ (297-331) で論拠となるのは、評価 (306, *time*,) が高まること、神々の掟、ギリシアの慣習 (311, *nomima*) そして臆病 (319, *deilos*) でないことである。ここに見られるテーセウスとアドラーストス、或いはテーセウスとアイトラーのスピーチは、嘆願者と被嘆願者という立場の違いがあるにも拘らず、対等な論争 (アゴーン、*agon*) の様相を呈している⁽¹¹⁾。

他方、テーセウスはポリスメンバー全員の同意が得られるよう説得しなければならないことを認識している (349-357)。しかし、実際にテクストには、説得の場面描写すら無く、恰も自動的にポリス全員が同意しているかのようである。ここには、受入れに関する受入側内部の対立は全く見られない。これは、テーセウスが自慢する、議論を重視するアテーナイの国制に矛盾するかの印象すら与える (433-441)。一方、迫害者であるテーバイとは完全に対立し、テーバイの使者とテーセウスのアゴーンで交渉は決裂し (399-584)、戦闘に突入する。

次に、同じく E. の *Heracl.* の検討に移る。ここでも、コロスを挟んで保護者側と迫害者側で、そして嘆願者も巻き込んで一種のアゴーンが、上記の *Supp.* と同様、繰り広げられる (179-180)⁽¹²⁾。ここでの嘆願者、ヘーラクレースの子供達と付添いのイオラーオス (ヘーラクレースの甥) が主張する嘆願の根拠は、四つ、即ち、ゼウス (の権威)、血縁関係 (*syngenes*)、レシプロシティ (*charis*)、羞恥心 (*aischron*) である (236-252, 但

し、デーモポーンはここでは第二と三をあわせて、全体で三つの理由があると言う)。ここで注目されるのは、やはり血縁関係とレシプロシティである。これらをより詳しく見ると、イオラーオスによれば、嘆願者達の父ヘーラクレースと受入れ側のデーモポーンの父テーセウスは、従兄弟関係になると言う(207-213)。さらに、イオラーオスは、かつてテーセウスをヘーラクレースが助けたことに対する返礼として嘆願者の保護を要求する(214-222, 220, *antidounai charin*)⁽¹³⁾。このように、この作品には嘆願要求の根拠に、単なるゼウスの権威や羞恥心といった一般的理由の他に、当事者の関係における血縁関係とレシプロシティの網の目が見事に組み合わされている。

ところで、受入過程におけるデーモポーンとアテーナイの人々の間のコンフリクトについては、確かに、デーモポーンは市民集会(335, *astonsylogos*)を召集すると言う。しかし実際には、敵方(エウリュステウスとアルゴス軍)との戦闘体勢に入り、また犠牲を捧げる神託が下されたりするストーリーの中で、集会における王の説得やそこでのコンフリクトは見られない。

最後に、S.OCについて簡単に触れたい。この作品では、オイディプースは確かに嘆願者(44, *hiketes*)として登場しているが、迫害者からの逃避という形ではない。むしろ、二つの相矛盾する神託を挟んで、テーセウスないしアテーナイ側とクレオンないしテーバイ側が対立しあうことになる。即ち、第一の神託では、オイディプースを受入れた側には利益を、追放した側には災害をもたらす(86-95)。第二の神託によれば、彼を、その生死に拘らず、テーバイ側が取り戻すと、テーバイに繁栄をもたらされるというものである(389-390)。ところで、オイディプースはアテーナイには特に血縁関係の類はない。従って、受入側(アテーナイ)との関係では、アテーナイが受入れを許可してくればこの第一の神託が実現されるため、アテーナイにとっては利益になるという意味で、彼は専ら自分は贈物(571, *doron*)であると主張して正当化する。ここでは血縁関係が無いことから、前面に出てくるのはレシプロシティである⁽¹⁴⁾。これとは対照的に、クレオンは彼を連れ戻す際に、彼等の血縁関係ないし親族関係(同じ *genos* である 737-739)を強調する。

一方、オイディプース受入れをめぐるテーセウスとボリスの対立

はもちろん、ここではポリス自身が登場しない。

ここで、嘆願劇に関するこれまでの分析結果を簡単にまとめておく。第一に、嘆願のスピーチにおいては、嘆願者の不可侵性の根拠として、あるいは嘆願要求の正当化の論拠として、従来指摘されてきたゼウスの権威や慣習ないし神々の掟等の概念だけでなく、相手方との血縁関係や過去のレシプロカルな関係への言及が重要な役割を演じている。この最後の二つは、個々の作品において同時に現れることもあれば、一方だけのこともある。

次に、受入れ側のコンフリクトについては、確かに迫害者側ないし敵対側との対立は厳しいが⁽¹⁵⁾、受入れ側内部での対立は比較的小さく、支配者と住民（ポリス）は対峙して説得するというよりも、むしろ信頼関係によって容易に同意が得られるとの印象をうける。

IV ホメーロスにおける嘆願のスピーチと受入れ側のコンフリクト

以下では、嘆願劇の嘆願スピーチにおける正当化根拠と論理構造、及び受入れ側のコンフリクトの特徴を把握するために、ホメーロスとの比較を行う。何故ならば、既に述べたように、嘆願劇における嘆願の特徴を、単に嘆願の「世俗化」ないし「政治化」としてではなく把握することが、ホメーロスとの比較によって可能になると考えられるからである。そこでまず、ホメーロスにおける嘆願スピーチの分析から始めたい。

嘆願者のスピーチにおける血縁関係ないし親族関係とレシプロシテイのロジックはホメーロスには見られるであろうか。評者がかつてクセイノスの分析において明らかにしたことは、ホメーロスでは完全クセイノスと父祖伝来のクセイノスをつなぐような用例が存在しないこと、換言すれば、完全クセイノスから父祖伝来への発展を示す用例もなければ、逆に父祖伝来のクセイノスの関係の始まりが完全クセイノスの受入れにみられたような行動様式やスピーチを伴ったものとして描かれている用例は見られないということであった⁽¹⁶⁾。ところで、嘆願者が同時にクセイノスを兼ねる場合は、その性質上、原則として完全クセイノスの場合である。このことは完全クセイノスがクセイノスとしての受入れを要求する際にとる手段には、ドロス、暴力、説得等の行動様式と並んで嘆願行為があることから明らかである。その嘆願行為のうち、ここで重要なのはスピーチによる嘆願であり、とりわけ、そのレシプロカルな論理

構造である⁽¹⁷⁾。ここには嘆願者と被嘆願者間には、親族関係もレシプロシティの実績も全く存在しない。存在するのはオデュッセウスのナウシカーに対するスピーチに見られるように(Od., 6, 149-185)、将来におけるレシプロシティ (の期待) にすぎない。

では、クセイノスと重ならない嘆願者の例で本稿にとって注目すべき例は何であろうか。まず、『イーリアス』第一巻の、テティスのゼウスへの嘆願が挙げられよう。アキレウスはテティスに対して、ゼウスへの嘆願の際、身体的接触に加えてそのスピーチの中で彼女がかつてゼウスを救ったことを思い出させるように言う (393-412)。さらに、『イーリアス』第九巻での、使者のアキレウス説得の場面がある。この巻は確かに儀礼的行為を含む嘆願を描いてはいないが、特にポイニクスのアキレウスへのスピーチの中での、リタイ (嘆願) とアーテーの比喻(502-512)、ならびにメレアグロスのストーリー(527-599)から見て、嘆願のモチーフは含んでいると言えよう。そして特に、メレアグロスへの嘆願における贈物による嘆願 (574-580)は、レシプロシティによる嘆願の一例と言い得るように思われる。このように、ホメーロスにおける嘆願のスピーチにはレシプロシティの論理が含まれていることが判明する。

では親族関係ないし血縁関係はどうであろうか。嘆願の当事者が相互に血縁関係である例 (例えば、上述のメレアグロスの物語中の父オイネウス、姉妹、母のメレアグロスへの嘆願, Il., 9, 581-585)、或いは嘆願者が親族関係に類比されている場合 (Od., 8, 546-547) はある。しかし、嘆願劇のように、レシプロシティの論理と組み合わされたスピーチを伴う例は管見の限り見当たらない。

次に、受入側のコンフリクトについては、次の場面が問題とされうることを示唆するに留めたい。第一は、オデュッセウスの、アルキノオス王、アーレーテー、そしてパイエーケスのリーダー達(Od., 7, 186; 8, 387 *hegetores kai medontes*,)及びデーモス(Od., 13, 14 *demos*)への嘆願である。受入側には確かにコンフリクトは無い。しかし、儀礼的動作による嘆願の直接的な宛人であるアーレーテーとアルキノオス王の他に受入れに関わるそれ以外のメンバーへの言及を見落とすことはできない。即ち、嘆願者オデュッセウスの受入れを最初に提案するのは、リーダーの一人、エケネーオスであり (Od., 7, 155-166)、アルキノオスも常に、リーダー達の賛同を求め(Od. 7, 186-196; 8, 387-397)、またオデュッセウスへの贈物をリ

リーダー達に要請する代わりに、彼等への補償をデーモスから取りたてる
とも提案する(Od., 13, 13-15)。リーダー達は問題無く賛同し、デーモスは
沈黙しているが、彼等の存在を見逃すことはできない⁽¹⁸⁾。実際、ポセイ
ドーンによる彼等への攻撃が行われた際も、アルキノオスはリーダー達
に犠牲を捧げるように要請している(Od., 13, 179-187, cf. 8, 564-571)。

最後のケースは、クリューセースのアガ멤ヌーン及びメネラーオ
スへの嘆願、そしてアガ멤ヌーンと他のアカイア軍リーダー達及びア
カイア軍との間のコンフリクトである。これは、恐らく『イーリアス』
解釈における難問中の難問であると思われるので、ここでは評者にとっ
て重要と思われる点を示唆するに留めたい。確かに、悲劇の場合と異な
り、アガ멤ヌーンはそれ以外の者の意向に反対して、身の代によるク
リューセース返還を内容とする嘆願を拒絶する⁽¹⁹⁾。そこまではコンフ
リクトは生じない。しかし、その拒絶の結果、アポローンのアカイア軍
殺戮が始まり、アキレウスにより集会が召集されて後は、リーダー間、
特にアキレウスとの関係で極めて深刻なコンフリクトが生じる。それは、
19巻でのアキレウスの戦線復帰、さらには、最終的には23巻のパト
ロクロスの葬送ゲームまで続くとも考えることも可能である。一般兵士は
確かに沈黙している。しかし、集会においてリーダー間で論争、対立が
生じる時、常に背後に控えている⁽²⁰⁾。アガ멤ヌーンはクリューセー
ース返還の代償を要求する相手として、アキレウス以外の者の名も挙げ
て、周囲を威嚇し、その反応を探る(II., 1, 137-139)⁽²¹⁾。さらに、アガ
멤ヌーンは、アカイア軍がアキレウスの言う通りにはしないだろうとい
って非難し(II., 1, 289)、周囲を味方につけようとする。一方アキレウスも
同様の非難を彼に浴びせる(II., 1, 150)。このように見ると、二人の争い
には、周囲の者が引き摺り込まれているのである。

V 嘆願におけるギリシア悲劇とホメーロスの比較の視点 —— 結 びに代えて ——

以上の分析結果を踏まえて、ここでは嘆願の視点、特に嘆願のスピー
ーチと受入側のコンフリクトという視点から見た、ギリシア悲劇とホメ
ーロスの類似点と相違点について述べ、そしてそこから悲劇の特徴と思
われる点を示唆したい。

ホメーロスにおける嘆願スピーチでは一般的なレシプロシティの原

理に言及することによって相手に嘆願を認めさせるか、若しくは何らかの血縁ないし親族関係のある当事者間で、当該関係からくるオブリゲーションをもとにして受入れを要求することが示唆的に述べられていた。それに対して、ギリシア悲劇では場合によっては、レシプロシティと親族という二つの根拠からくる要求、換言すれば二つのオブリゲーションが重なって相手側にのしかかることもある。この意味で、嘆願劇における当事者の関係は、ホメーロスよりも濃密な、或いは重いオブリゲーションによって結び付けられている場合がある。従って、悲劇ではホメーロスよりも当事者の行為の選択の余地は少なく、また選択の仕方によっては、より深刻なオブリゲーション違反ともなりうる。

しかし、他方でホメーロスと悲劇の差異をあまり大きいものと考えることにも注意を要する。この問題に関する近時の議論は錯綜しているが⁽²²⁾、受入側における、責任者ないし支配者とそれを取り巻く者達（例えば、ポリス住民、リーダー達、アカイア軍等）の関係には、ホメーロスと嘆願劇の間には連続面があるように思われる。ホメーロスの登場人物達も周囲を意識して行動し、スピーチを行っているし、他方で、嘆願劇の人物と周囲は常に対立的というのでは無い。このような共通点は、やはり見落としてはならないと思われる。このように見てくると、岡論文は、評者が従来から抱いている問題関心から、ホメーロスと悲劇作品を結び付けて考察する興味深い視点を提供しているように思われる。今後も継続して、この視点から分析を行ってゆきたいと考えている。

註

(1) 本書評の対象は冒頭に掲げた岡論文であるが、私見を若干展開した書評論文の体裁をとっている。ギリシア悲劇、ラテン韻文からキケローまでをカバーした本書全体の書評はもちろんのこと、新稿二編（第一章および第四章）の書評すら、評者の能力不足から為し得なかったことに対し、編集者には心からお詫びいたします。尚、以下、作家、作品等の略号は、L.S.J.に、雑誌等のそれは *L'Année Philologique* に、原則従う。ギリシア悲劇とホメーロスのテキスト底本は（現在入手可能な）O.C.T.に従い、邦訳として松平・久保・岡（編）『ギリシア悲劇全集13巻・

別巻』（岩波書店）、及び呉訳、松平訳のそれぞれ岩波文庫版『イ（一）リアス』『オデュセイア（一）』を参照した。

(2) Gould, J., 'Hiketeia', *JHS* 93 (1973), 74. 尚、グールドのこの論文については、例えばフィンレイもリーディングスに挙げている。Finley, M. I., *The World of Odysseus*, 2nd ed. (Harmondsworth 1979) 183. 同邦訳、M. I. フィンリー著（下田立行訳）『オデュッセウスの世界』（岩波文庫）352頁。

(3) 最近の邦語関連文献として、久保田忠利「古代ギリシアにおける嘆願について——ギリシア悲劇を中心に——」『文明研究』（東海大学文明学会）12（1994）77-87.

(4) この叙述は前掲『ギリシア悲劇全集』第2巻アイスキュロス『ヒケティデス——嘆願する女達——』（岡道男訳）の解説部分にはほぼ従っている。尚、同全集別巻「ギリシア悲劇用語解説」（久保田忠利著）の「嘆願劇」の項目も参照せよ。

(5) コロスの重要性について、本稿執筆について示唆を得たのは下記の文献。

Gould, J., 'Tragedy and the Collective Experience', in Silk, M. (ed.), *Tragedy and the Tragic. Greek Theatre and Beyond* (Oxford 1996) 217-243., Gould, J., 'Myth, memory and the tragic chorus; a paper read at Bristol Colloquium on Greek Myth, 'Myth into Logos' held at Bristol in July 1996.

(6) 葛西康德 書評 Buxton, R. G. A., *Persuasion in Greek Tragedy. A Study of Peitho* (Cambridge etc. 1982) 『国家学会雑誌』98-5.6(1985), 145-148. この書評の中で評者は、ペラスゴス王のペラスゴイ人への説得シーンにおいて、両者の間には一種の信頼関係が前提されており (623, *eupeithes*)、かかる具体的な社会関係の中で説得の問題を考えるべきであると示唆した。

(7) Gould, 'Hiketeia', 77. グールドは、complete supplication と figurative supplication の興味深い区別を行っている。しかし、全体としてスピーチの分析は不十分である。

(8) Gould, 'Hiketeia', 75-77. 尚、パーカーは、'help me' タイプと 'spare me' タイプに分類して分析している。Parker, R., *Miasma. Pollution and Purification in early Greek Religion* (Oxford 1983) 181-186.

- (9) 今回本書第一章（「オイディプースと真実」）の書評を断念したのは、「神託」や「呪い」等のギリシア宗教上の重要概念の理解が評者には困難であったからでもある。これらの概念は嘆願劇にも登場し、重要な機能を営んでいると思われるので、今後も関心を持ち続けたい。
- (10) 19, *nomima theon*. 但し、この言葉にはっきりと言及しているのは、アドラーストスではなくコロスである。
- (11) Lloyd, M., *The Agon in Euripides* (Oxford 1992), 76-83, .76-79. 特に、76-79.
- (12) Lloyd, M., 72-76.
- (13) Wilkins, J., *Euripides Heraclidae* (Oxford 1993) 78-81. 尚、379行のカリスにつき、『ギリシア悲劇全集』（岩波書店）第5巻（池田訳）222頁脚註（1）参照。
- (14) 前掲久保田論文、81—82頁参照。
- (15) A. *Supp.* 914, *karbanos*, E. Heracl., 131 *barbaros*. 尚、このテーマ全体については、ホールの研究がある。Hall, E., *Inventing the Barbarian. Greek Self-Definition through Tragedy* (Oxford 1989).
- (16) 葛西康德 「ホメーロスにおけるクセイノス(*xeinos*)の一側面」、安藤弘（編）『叙事詩の世界』（新地書房1992）61—124頁、特に109—110頁及び註(58), (59), (60), (61)参照。
- (17) オデュッセウスのナウシカーへのスピーチの分析は拙稿80—82頁参照。
- (18) Gould, J., 'Tragedy and Collective Experience', 232, 242 n.87.
- (19) Gould, J., 'Homeric Epic and the Tragic Moment', in Winniffrith, T., Murray, P., Gransden, K. W., *Aspects of the Epic* (London etc. 1983) 32—45, 特に, 36.
- (20) 上註(18)参照。
- (21) Dover, K., *Lysias and Corpus Lysiacum* (Berkeley/Los Angeles 1968) 177-179. Gould, J., 'Homeric Epic and the Tragic Moment', 40-41.
- (22) 本稿の問題関心と関わる視点から、ホメーロスとギリシア悲劇をトータルに比較した最近の研究の一つとして、シーフォードのものがある。Seaford, R., *Reciprocity and Ritual. Homer and Tragedy in the Developing City-State* (Oxford 1994)

葛西康德（新潟大学）